

一般選抜試験（A日程）問題

現代の国語（六〇分）

（家政学科、美術表現学科）

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で形式段落第一段、第二段冒頭には①、②の番号を付した。

① 「否定」というのは考えはじめるとかなりむずかしいものです。たとえば机の上に目をやると、そこにはコーヒーカップが置いてあって、コーヒーが半分入っていて、紙のタバ^①があつて、その紙には何やらごちゃごちゃ書きつけてあつて、パソコンがあつて、等々、私たちはただそこにあるものだけを目にします。机の上をことばで描写するとき、ただ肯定形の記述だけですむように思えます。だとすれば、「否定」というのはどこで現れるのでしょうか。いや、「現れない」から「否定」なのではないか。とすると、思わず「この世界に否定なんかないんだ」と言いたくなります。そう言っちゃってから、その台詞^②がまさしく否定形だったと気づいて苦笑いするわけですが。

② たとえば、私の机の上にはなぜか金塊がありません。いまはじめて気がつきました。なんでそんなだいなことに気がつかなかったのだろう。まあ、理由は簡単です。いままで「机の上に金塊がある」なんて考えたこともなかったからです。そうして見ると私の机の上にはいろんなものがあります。リカちゃん人形もないし、奈良漬もない。〈まことにもつてつまらない〉でも、実際問題として、私はそんなこと言いたくはならない。「金塊がないぞ」とか「リカちゃん人形がないじゃないか」といった訴えは、そういう関心があるひとだけが発するものです。「机の上に金塊がある」という肯定形のことさらに

関心のあるひとだけが、「机の上に金塊がない」という否定形の主張を口にします。

このことは否定というものの正体を少し明らかにしてくれます。「机の上に金塊がある」なんて思ってもみないひとは、「机の上に金塊がない」とも思わない。「机の上に金塊があるといいな」と思っているひととか、あるいは誰かに「あなたの机の上に金塊があるわよ」とか言われたひとだけが、現実の机を見て、「ないじゃん」と思うのです。つまり、「机の上に金塊がある」という肯定形の主張がなんらかの仕方^③でネットウにあつて、でも現実の机の状況がそれを打ち消すとき、私たちは「金塊がない」と言うのです。このような、「主張Aの打ち消し」が「Aの I」にほかなりません。

少しむずかしい言い方になるかもしれないけれど、一般的に言わせてください。なんらかの主張「A」を否定して「Aではない」と正しく言えるのはどういうときか。それは、その状況で「A」と主張するとまちがいになってしまうときです。私の机の上に関して、「金塊がない」と正しく主張できるのは、いまこの状況で「金塊がある」と主張すると II ということがはつきりしているからです。なんだかあたりまえに感じますか？ いや、ぜんぜんあたりまえじゃないんですよ。これ。

「金塊がある」という肯定形の主張と「金塊がない」という否定形の主張は根本的にことばの働き方が違う、そう言ってもいいです。どう違うのか。「机の上に金塊がある」というのは、机の上の状態を描

写したものです。もちろん「机の上に金塊がない」という主張も、机の上の状態を描写したものと違ってよいのですが、しかし「机の上に金塊がない」は基本的に「机の上に金塊がある」という主張に対して、「その主張はまちがっている」と主張するものにほかなりません。「Aではない」は「A」という主張がまちがいだと訴えることを通して、いわば、間接的に世界の状態を描写しているわけです。

あまりうまく言えてる気がないので、少しワキから攻めてみましょう。机の上の状態を絵に描くことを考えてみてください。机の上にパソコンが置かれてあるところを描く。うまいへたはどうでも、まあ、描けます。じゃあ、机の上にパソコンがない絵はどうか。困ります。机を描いて、その上にパソコンを描かないで置く。そんなところでしようか。じゃあ、机の上にリカちゃん人形がない絵はどうか。机を描いて、その上にリカちゃん人形を描かないで置く。だけどこれじゃあ、「パソコンがない」と同じです。いや実際、その絵は「机の上に金塊がない絵」でもあり、「奈良漬がない絵」でもあります。全部、同じ絵です。

なんだかなあ、というので、一工夫するとすれば、パソコンを描いて、それからそれに×をつける、なんていうのが考えられるでしょう。リカちゃん人形の場合には、リカちゃん人形をいったん描いて、それから×をつける。私は、否定²というのはまさにこの×印なのだと言いたいのです。×印は、世界を写し取ったものではありません。(×印は写真にとれません。その意味で、「ないもの」を写真にとることはできない。)世界を写し取った一枚の絵に対して、私が新たに付け加えたものです。

くりかえさせてください。「A」という肯定形の主張はある事実が成り立っていることを描写したのですが、他方、「Aではない」という否定形の主張は否定的な事実が成り立っていることを描写したものとより、「A」という主張がまちがっていると言い立てるも

のにほかなりません。

出典 野矢茂樹 『入門！論理学』より

問一 ①～⑤のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問二 第①、②段落の関係を説明した次の文の [] を二十五字以内で補い、文を完成させなさい。

(説明文)

第①段で示された、「否定」というのはどこで現れるのか、という疑問を受けて、第②段では [] 関係となっている。

問三 I [] に入る言葉を本文中から二字で抜き出しなさい。また II [] には本文中の表現を利用して七字で補い、文脈が通るようにしなさい。

問四 間接的に世界の状態を描写しているとあるが、この場合の「世界の状態」とは具体的にどんな状態か。解答欄に合うよう十字以内で説明しなさい。

問五 否定²というのはまさにこの×印なのだとはどういうことか。それを説明した次の文の [a]、[b] にそれぞれ二字で本文中から適語を抜き出して入れ、文を完成させなさい。

(説明文)

絵に上書きされた×印には、×印が写真にとれないと同様に、[a] と [b] という、目には見えない人間の意思が反映されているということ。

問六 本文で論じている「否定形」の説明として適当なものを、次のア～オの中から一つ選り記号で答えなさい。

ア 否定形という修辭法がなくても、物のあるなしの表現には何ら支障はない。

イ 否定形で示される結論は、結局、人の欲望は限りがないというところに落ち着く。

ウ 否定形は人の意識の中だけで使える修辭法であり、人との会話の場面では使えない。

エ 否定形は、人がある事物に対して関心がある場合にのみ正しい表現となる修辭法である。

オ 否定形で表現できるのは、ある人の物事に対する関心の度合いだけだという特殊性がある。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

* 貝原益軒の『養生訓』には体力という思想はない。からだは鍛えるというより、むしろ氣をめぐらして氣を調えることが説かれ、¹今日の体調という考えに近い。

²もとより体格も体力も大切であるが、だれもがすぐれた体格や体力を与えられているわけではないし、なによりその人のライフサイクルのなかで体格・体力は変化していくものである。

人はいつも健康ではいられない。良いときもあれば悪いときもある。そのときその人なりからだの調子が良ければそれを健康と考えるというのが体調という考え方である。

たとえば、人とくらべて、体格は劣り、体力も弱く、体質も悪くても、その人なりに体調が良ければ、それはそれで健康と考えていいのではないか。筋肉の力はどうか、どれだけ速く走れるかといったこと

より、「今朝は寝起きがいい」と感じれば、それを自分にとっての「健康」と考えるということである。

体調の調は、調える調、また調和の調、調節の調、バランスとかハーモニーを大切にするという考えである。

その意味では、発展と開発の時代から安定と調和の時代へと大きく変わろうとしている今日の時代の流れとも連関しているといえる。

こうした力や量の比較にとらわれないで、それ自体に価値を認める体調という考えには、³健康人や若者だけに価値があるのではなく、病人、障害者、子ども、老人にも価値があるという思想につながる。

たとえ病氣や障害を抱えていても、* QOL (いのちの質) が充たされていれば、それを健康と考える。それは、弱みを強みに変えていくという考えであり、前向きな考え方であるともいえる。

こうした体調という考えは、「健康をどう見るか」という健康観というより、個々人が「健康をどう感じるか」という意味で、「健康感」と言ってもよい。

その文脈でいうと、今日の日本人がおちいつているのは「不健康感」と言える。ここまですると、健康観も生死観にかかわる問題と言えるのである。

貝原益軒の『養生訓』でいう「氣」「元氣」は、科学的・医学的な計測や画像によってわかるものではなく、自分で感じ自分でつくるものであるという意味で、「健康感」に属すると言える。

「健康」をすべて数値や画像で認識し判断しようとするのではなく、³数や形ではハカれない目に見えない価値を認め信じていくことが、これからの時代には大切なことなのかもしれない。

健康について、このように人間存在の深い部分にまで立ち返って考えていくということは、一九九九年にWHOがこれまでの健康の定義

(身体的・精神的・社会的 * well-being) に「* Spiritual well-being」を追加したことも関連しているのではないだろうか。

医に通ひ猶その上の土用灸^{どようきゅう}

桜井よし子

これは朝日新聞長野版（一九八九年八月十五日）の俳壇に出ていた一句である。医者にかかりながらも、なおそれだけで満足できず、旧暦の土用の日にやるとくに^④キクといわれる*お灸をすえに行くという意。だれしも思い当たる句である。

医者通いもお灸も適時適切にやるのならない。しかし、過剰な医療や健康法にからめ取られてしまうと、自分のからだだが本来もっている生体感覚を衰えさせ、^⑤生身の健康感を見失ってしまう。

自分の生きる力を置き忘れ、ひたすら健康法を追っていても、健康はやってこない。そして、ほんとうの生きる力は、利己的で物質的な健康観、また^④他力的で依存的な健康観からは生まれぬ。

「健康」というものが、どこかに別にあるのではない。病気も健康も自分の持ち物である。まず、自分なりの生き方に根ざした自分なりの心身の生きる力と感覚を取り戻すことではないだろうか。

医療水準が低く健康産業などなかった江戸時代の人のほうが「健康」であったことを、今いちど思い出し、人間にとって「健康とは何か」という問いを問い直してみることが、とくに今日こそ、必要なことかもしれない。

出典 立川昭二 『文化としての生と死』より

* 貝原益軒……江戸時代の学者。一六三〇～一七一四年。『養生訓』はその著書で、健康法などについて述べられている。

* QOL……Quality Of Life の略。精神的豊かさや満足感から人生の豊かさをとらえる考え方。

* well-being……個人や社会のより良い状態。

* Spiritual well-being……人生に意味や目的を見出し、自己・他者・コミュニティ・

自然・より大きな力との関係性を通じて内面的な充実

感や全体性を育む幸福な状態。

* お灸……ヨモギから作った「もぐさ」に火をつけ、その熱による温熱刺激を体の特定部位に与えて（これを「すえる」という）、体調を整える東洋医学の治療法。

問一 ①～⑤のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

問二 今日^①の体調という考えとは、具体的にはどのような考えか。解^②答欄に合うよう、本文中の言葉を使って二十字以内で説明しなさい。

問三 もとよりの意味として適切なものを、次のア～オの中から一つ^③選び、記号で答えなさい。

ア 今となつては イ 言うまでもなく ウ ひるがえって
エ 最近では オ 例えれば

問四 健康人^④や若者だけに価値があるのではなく、病人、障害者、子ども、老人にも価値があるとあるが、そう言えるのはなぜか。解^⑤答欄に合うように三十字程度で説明しなさい。

問五 他力的^⑥で依存的な健康観を具体的に表現している箇所を、本文中より十字以内で抜き出しなさい。

問六 筆者の「健康」に対する考えをまとめた上で、それに対するあなたの「健康観」を、百二十字から百六十字以内で述べなさい。

①	きた(える)
②	かか(えて)
③	測(れない)
④	効(く)
⑤	なまみ

問二

その時、その人なりに、体の調子が良ければ健康

という考え。

問三

イ

問四

健康とは、体力の有無でなく、体調の良し悪しで決まる。見方にならないうきから。

問五

過剰な医療や健康法

問六

筆者は、科学的な数値よりも、感覚を大切に述べる。健康だとは、実感し、生きている。病気が、うつや私生活に、回復力がない。医学的に、ストレスが、日常生活に、悪い影響を及ぼす。常に前向きな気持ちで生活する。心が、健康になる。